

平成 17 年 10 月 3 日	<b>病害虫発生予報</b> <b>10 月号</b>	茨城県病害虫防除所 茨城県植物防疫協会
---------------------	--------------------------------	------------------------

安全・安心な農作物は，農薬使用の記録と農薬使用基準の遵守から！  
農薬の総使用回数は「有効成分」で規制されます  
< 目 次 >

<b>．今月の予報</b>	
<b>【注意すべき病害虫】</b>	
イチゴ：炭そ病，うどんこ病，オンシツコナジラミ	1
抑制トマト：シルバーリーフコナジラミ	2
抑制キュウリ：褐斑病，うどんこ病	2
抑制キュウリ：シルバーリーフコナジラミ	3
秋冬ハクサイ：白斑病	3
共通害虫：オオタバコガ	3
共通害虫：ハスモンヨトウ	4
<b>【その他の病害虫】</b>	4
水稲，大豆，イチゴ，抑制ピーマン，秋冬ハクサイ，冬レタス，秋冬ネギ， アブラナ科野菜共通，ブドウ，カキ，リンゴ	
<b>．病害虫ミニ情報</b>	
水田における収穫後の管理作業について	6
農薬登録速報(8月)の概要	7
<b>．病害虫資料室</b>	
今月号の病害虫から（ハクサイの白斑病，べと病）	9
<b>．今月の気象予報</b>	
	12
<b>．テレホンサービス</b>	
	12
普通作物	029(226)5321
園芸作物	029(226)6131

本文に記載された農薬の登録内容は，平成 17 年 10 月 3 日現在のものです。  
農薬を使用する際は，農薬ラベルに記載の使用基準，注意事項等を確認してください。

詳しくは，病害虫防除所へお問い合わせ下さい。  
茨城県病害虫防除所 Tel :029-227-2445  
予報内容は，ホームページでも詳しくご覧いただけます。  
ホームページアドレス <http://www.jpnn.ne.jp/ibaraki/>

・今月の予報  
【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. 炭そ病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	多い	県下全域

[予報の根拠]

7月第1半旬～8月第6半旬に度々まとまった降雨があり、露地育苗では感染好適条件が続いた。

9月下旬現在、発病株率、発生地点率とも平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

露地育苗では、親株や苗が感染していた可能性が高いため本圃の防除を行う。  
発病株は、直ちに抜き取り処分する。また、補植する場合は、健全株を厳選する。

2. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並	県下全域

[予報の根拠]

9月下旬現在、発病葉率、発生地点率は平年並である。

[防除上注意すべき事項]

ビニール被覆後に発生が多くなるため、被覆前後の防除を徹底する。  
薬剤散布は、十分な薬量で葉裏にもよく付着するよう丁寧に行う。

3. オンシツコナジラミ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
やや早い	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

9月下旬現在、発生時期はやや早く、寄生葉率、発生地点率は平年よりやや高い。

気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、ハウス内は発生を助長する温度条件になる。

[防除上注意すべき事項]

定植後間もなくから発生が認められる場合は発生が多くなる傾向があるため、初期防除を徹底する。

薬剤散布は、十分な薬量で葉裏にもよく付着するよう丁寧に行う。

## 抑制トマト

### 1. シルバーリーフコナジラミ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	多い	県下全域

[予報の根拠]

9月下旬現在，寄生葉率，発生地点率とも平年より高い。  
気象予報によると，向こう1か月の気温は平年より高いと予想され，ハウス内は発生を助長する温度条件になる。

[防除上注意すべき事項]

発生が多くなると，防除が困難となる。また，本種により果実の着色異常が引き起こされるため，発生したハウスでは防除を徹底する。  
本種は葉裏に寄生するため，葉液は下方から吹き上げるように散布するなど，葉裏にも十分かかるよう丁寧に行う。

## 抑制キュウリ

### 1. 褐斑病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
やや早い	多い	県下全域

[予報の根拠]

9月下旬現在，発生時期は平年よりやや早く，発病葉率，発生地点率は平年より高い。

[防除上注意すべき事項]

高温多湿条件で発生しやすくなるので，換気して除湿に努める。  
発生初期の防除を徹底する。また，薬剤散布は，かけむらのないよう丁寧に行う。

### 2. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

9月下旬現在，発病葉率は平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

発生初期の防除を徹底する。また，薬剤散布は，かけむらのないよう丁寧に行う。

### 3. シルバーリーフコナジラミ

#### [予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	多い	県下全域

#### [予報の根拠]

9月下旬現在，寄生葉率，発生地点率は平年より高い。  
気象予報によると，向こう1か月の気温は平年より高いと予想され，ハウス内は発生を助長する温度条件になる。

#### [防除上注意すべき事項]

本種は葉に白化症状を引き起こすため，防除を徹底する。  
薬剤散布は，葉裏にも十分かかるよう丁寧に行う。

### 秋冬ハクサイ

#### 1. 白斑病

#### [予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い~多い	県下全域

#### [予報の根拠]

9月下旬現在，発病度は平年より高く，発生地点率は平年よりやや高い。  
気象予報によると，向こう1か月の降水量は平年並か多いと予想され，発生を助長する条件である。

#### [防除上注意すべき事項]

発病を確認したら，早期に薬剤散布を行う。  
今後の天候に注意を払い，降雨が続く場合には適宜防除を実施する。  
薬剤散布は，薬液が葉裏や株元にもかかるよう丁寧に行う。  
肥切れ，排水不良等は発生を助長するので，適切な肥培管理，排水対策等を行う。

病害虫資料室(p.9)参照

### 共通害虫

#### 1. オオタバコガ

#### [予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い~多い	県下全域

(オオタバコガ続き)

[予報の根拠]

9月下旬現在，フェロモントラップへの誘殺数は，水戸市で平年より多い。  
9月下旬現在，ナスにおける発生量は過去3年中で最も多い。また，ダイズ，ハクサイ，レタス，キャベツ等でも幼虫の発生を確認している。  
気象予報によると，向こう1か月の気温は平年より高いと予想され，発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

圃場をよく観察し，幼虫の早期発見に努める。齢期が進むにしたがって薬剤の効果は低くなり，中齢幼虫になると果実や結球内に食入するため，食入前の若齢幼虫のうちに防除を徹底する。  
薬剤散布は，葉裏や株元にも薬液がかかるように丁寧に行う。また，薬剤抵抗性の発達を抑えるために，同一系統の薬剤は連用しない。  
施設栽培では，出入り口や開口部に防虫ネットを張り，成虫の侵入防止に努める。

2. ハスモンヨトウ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

9月下旬現在，フェロモントラップへの誘殺数は水戸市，筑西市で平年よりやや多い。  
9月下旬現在，イチゴにおける発生量は平年よりやや多い。また，ダイズ，ハクサイ，レタスにおける発生量は平年並である。  
気象予報によると，向こう1か月の気温は平年より高いと予想され，発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

老齢幼虫になると，薬剤が効きにくくなるため，圃場をよく見回り，若齢幼虫のうちに防除を行う。特に，ハクサイ，レタス等では，結球内に入られるとその後の防除が困難になるので，初期の防除を徹底する。  
薬剤散布は，葉裏や株元にも薬液がかかるように丁寧に行う。また，薬剤抵抗性の発達を抑えるために，同一系統の薬剤は連用しない。  
施設栽培では，出入り口や開口部に防虫ネットを張り，成虫の侵入防止に努める。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
水稲	黄萎病 縞葉枯病	-	黄萎病は主に県西地域で例年発生を認める。黄萎病はツマグロヨコバイ幼虫，縞葉枯病はヒメトビウンカ幼虫が媒介する。収穫後はできるだけ早く耕起作業を行い，害虫の越冬場所となるイネの株や雑草を無くす。

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
大豆	紫斑病	発生量：平年並	収穫は適期に行い，収穫後は速やかに乾燥・脱粒する。
イチゴ	ハダニ類	発生量：やや多い	9月下旬現在，平年よりやや多い発生である。ビニール被覆前後の防除を徹底する。
抑制ピーマン	シルバーリーフコナジラミ	発生量：多い	9月下旬現在，幼虫，蛹及び成虫の発生を認めた。幼虫，蛹の平均寄生葉率は9.6%である。果実に着色異常を引き起こすため，防除を徹底する。
	ヒラズハナアザミウマ	発生量：やや多い	9月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
秋冬ハクサイ	べと病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。 病害虫資料室(p.9)参照
	黒斑病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
	軟腐病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。 <b>風雨が多いと発生が助長されるので，台風等の風雨の後には，防除を徹底する。</b>
冬レタス	菌核病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。葉の基部を観察し，発生を認めた場合は初期防除を徹底する。
	腐敗病	発生量：平年並	9月下旬現在，発生を認めない。 <b>結球開始期に降雨が続くと発生しやすいので，初期防除を徹底する。</b>
秋冬ネギ	さび病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
	べと病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
	黒斑病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
	ネギハモグリバエ	発生量：やや多い	9月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
	ネギアザミウマ	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
野菜共通 アブラナ科	コナガ	発生量：平年並 ～やや少ない	9月下旬現在，フェロモントラップ（八千代町）への誘殺数は平年並～やや少ない。
ブドウ	晩腐病	-	9月下旬現在，平年より多い発生である。収穫後は，落葉や巻きづるを集めて適正に処理する。
	べと病	-	9月下旬現在，平年よりやや多い発生である。収穫後の防除を徹底し，落葉は集めて適正に処理する。
カキ・リンゴ	果樹カメムシ類	平年並～やや少ない	9月下旬現在，予察灯への誘殺数は，平年よりやや少ない。果樹園内でカメムシ類を発見した場合，薬剤の収穫前日数に十分注意し，早急に防除を行う。

## 水田における収穫後の管理作業について

平成 17 年産の水稻は現在も収穫中ですが、本県における最近の病害虫の発生状況を踏まえて、これから冬に向けての収穫後の水田管理について考えてみましょう。

### 1. 水田における病害虫の発生状況

県内で発生が多いものとして、病害ではいもち病、紋枯病、稲こうじ病、害虫では斑点米カメムシ類、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、ウンカ・ヨコバイ類があります。この他、イネヒメハモグリバエやイネツトムシ等が突発的に発生しています。また、黄萎病、イネクロカメムシ、ニカメイガは増加傾向にありますが、今のところ大きな被害が発生するほどにはなっていません。

### 2. 今後の対策

病害虫の防除は、薬剤防除に頼るだけではなく、適切な栽培管理を行い、病害虫の発生しにくい環境を整えておくことが重要です。これから冬に向けて行う作業として、下記があります。

#### 10 月中に稲ワラのすきこみ

気象変動に左右されない米作りには「健全な土づくり」が大切です。これは、病害虫に強いイネをつくる上でも重要といえます。健全な土作りのための稲わらのすきこみは病害虫そのものを抑制する効果も期待できます。

いもち病菌は、種子や被害ワラで越冬し、翌年の発生源となりますが、腐熟、分解した稲ワラでいもち病菌は越冬できません。このため、いもち病を抑える第一歩として、被害ワラは収穫後できるだけ早めにすきこみ、早期に腐熟させることで、翌年の発生源をできるだけ少なくしておくことが重要です。

また、黄萎病に罹ったイネの再生芽（ひこばえ）を、越冬前のツマグロヨコバイが吸汁して病原体を獲得すると、虫の体内で病原が越冬して翌年の発生源となります。このため、稲ワラをすき込む作業は、病原体を持ったイネの再生芽を枯死させると同時に、ツマグロヨコバイの越冬場所となるイネ科雑草を減らし、黄萎病の蔓延を防ぐのに役立ちます。

ヒメトビウンカが媒介する縞葉枯病についても、媒介虫の越冬場所となる水田のイネ科雑草を無くすことは、蔓延防止に役立ちます。

さらに、ニカメイガは一般的に稲ワラの中で幼虫で越冬するため、水田に残った株や稲ワラをすきこみ、早期に腐熟させることは、発生抑制につながります。

#### 適正な施肥量の把握、栽培方法の見直し

いもち病や紋枯病は、多肥で株間が混んだ水田で多発します。病害虫防除所の調査でも、葉色が濃く、茎数が多い場合に、いもち病の発生が助長される事例が確認されています（表）。毎年、いもち病や紋枯病が発生する水田では、薬剤による防除対策だけではなく、土壌診断を行い、肥沃度に応じた施肥量を把握しましょう。また、適正な栽植密度や植付本数となるよう、苗箱への播種量を確認し、移植機の整備、調整をしておきましょう。さらに、今年の稲作を振り返り、中干しの開始時期など、栽培管理が適切であったかどうか検討してください。

表 イネの生育状況といもち病の発病程度

	水田 A	水田 B
葉色	3.5	4.3
茎数 (本/m <sup>2</sup> )	470	614
いもち病 発病度	25	45
上位葉病斑数 (25 株あたり)	2	21
発病程度	中	多

7 月上旬調査、移植日、防除体系は同じ。

## 農薬登録速報（8月）の概要

平成17年8月期間中（8/1～8/31）に新規・変更登録のあった農薬は、以下のとおりです。なお、農薬の使用にあたっては、必ずラベル等を確認してください。

### 殺虫剤・殺菌剤・殺虫殺菌剤・殺そ剤等

新規> エイゲン水和剤，プラスタ顆粒水和剤，ベジキーパー水和剤，リクトップ，協友ダントツフロアブル

変更> Dr.オリゼプリンス粒剤10，Dr.オリゼプリンス粒剤6，TD粒剤，アタブロン乳剤，アフーム乳剤，アプロードエースフロアブル，アミスターオブティフロアブル，イオウフロアブル，インダーフロアブル，オーシャイン水和剤，オーソサイド顆粒水和剤80，オサダンフロアブル，オルトラン水和剤，オンコルマイクログラブル，オンコル粒剤1，オンコル粒剤5，オンダイアエース粒剤，オンリーワンフロアブル，カスケード乳剤，サンヨール，サンヨール液剤AL，サンリットカルホス粉剤，スタークル顆粒水溶剤，セイビアーフロアブル20，ソイリーン，ダズバン水和剤25，ダズバン乳剤40，ダイアジノン水和剤34，ダコニール1000，タチガレエース液剤，タチガレン液剤，タチガレン粉衣剤，ダントツ水溶剤，ティベック，テーク水和剤，ノーモルト乳剤，パッチコロム水和剤，バナーマックス液剤，ブイゲット粒剤，ブイボン乳剤，プレビクールN液剤，ホームガーデン粒剤，ホクコーオンリーワンフロアブル，ミルベノック乳剤，モスピランジェット，モスピラン水溶剤，モスピラン粒剤，ラノー乳剤，リゾレックス水和剤，家庭園芸用オルトラン水和剤

### 除草剤等

新規> エイゲン水和剤，クサトリ-DXフロアブルH，クサトリ-DXフロアブルL，シリウスターボ1キロ粒剤，シロノックLジャンボ，テラガードLジャンボ，テラガードジャンボ，テロス250グラム，協友ボス1キロ粒剤

変更> アピロファインDジャンボ，イッテツフロアブル，ウェイアップフロアブル，エリジャンEW乳剤，エリジャンジャンボ，キラ星1キロ粒剤，クサトッタ1キロ粒剤，クサブロック，クラッシュEXジャンボ，サキドリ1キロ粒剤，サキドリEW，サラブレッドRXフロアブル，スパークスター1キロ粒剤，セレクト乳剤，ダッシュワンフロアブル，ダブルスターSB顆粒，ダブルスター顆粒，テイクオフ粒剤，デルカット乳剤，トップガン250グラム，ノミニー液剤，パットフルエースLジャンボ，ヒエクリーン1キロ粒剤，フォーマット1キロ粒剤51，プレッサフロアブル，ポルトフロアブル，ユートピア1キロ粒剤，ラウンドアップハイロード，ラクダープロLフロアブル，ラッソー乳剤，ロングショット1キロ粒剤，ワンステージ1キロ粒剤，丸和サーベルDF，三共ザーベックスDX1キロ粒剤

### 植調剤等

変更> CX-10，ビーエー液剤，プリモマックス液剤

### その他

変更> キヒゲンR-2フロアブル

### 失効農薬

アグロスDDVP乳剤75，アグロスサイアソン粉剤，アグロススラッシュ粒剤，アグロスマラソン粉剤1.5，オフナックバッサ微粒剤F，



オフナック苦土入り複合硝加燐安 S 1 2 1 号，グラッシー顆粒，グレートムトレボン粒剤，サンケイチック，ソビー T - 7 . 5 乳剤，ヤシマ DC 油剤，ヤシマラブサイドベフランオフトレボン粉剤 DL ，ラブサイドオフナックバッサ粉剤 DL ，ローヌ・プーランアージラン液剤，一農 DC MU 粉剤，三菱クサストップ 1 キロ粒剤 5 1 ，三菱クサストップ A 1 キロ粒剤 3 6 ，三菱クサストップ L フロアブル，三菱クサストップフロアブル，三菱グラッシー顆粒，三菱トレビエース水和剤，大塚グラッシー顆粒，日曹レピタームフロアブル

農薬の登録失効は，同一成分の農薬においても販売メーカー毎になりますので，ご注意願います。

## 病害虫資料室【今月号の病害虫から】

病害虫防除所ホームページ上で、写真をご覧いただけます。  
ホームページアドレス <http://www.jpnpn.ne.jp/ibaraki/>

### ハクサイ

#### 白斑病

被害の様子：はじめ葉の表面に、灰褐色の小さい斑点ができる。病斑はのちに拡大し、円形、多角形または不規則な形となる。大きさは6～10mmとなり、灰白色または白色となる。病斑がたくさんできると、葉は火であぶったようになり、著しく商品価値を損なう。はじめ老葉に発生し、次第に新葉に進む。

ハクサイの全生育期を通じて発生し、特に秋から初冬にかけて多雨の年に発生が多い。また、連作すると発病が多くなる。

病原菌の生態：白斑病菌は、主に菌糸の形で罹病葉の組織内で越冬し、温度と湿度が適当な条件になると分生子を形成し、空気伝染する。分生子は葉から侵入し、侵入後15～16日で病斑が作られる。葉の病斑上にも分生子ができ、風などで飛散して二次感染する。

防除のポイント：肥料切れしないように注意し、発病初期からの薬剤防除を徹底する。薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもかかるよう丁寧に行う。

写真1：外葉の病徴

#### べと病

被害の様子：主に葉に発生する。葉では、はじめ外葉に淡黄色の不規則な形をした病斑ができ、その裏面に灰白色のカビが生える。病斑は葉脈に仕切られた多角形となることもある。病斑はやがて淡褐色となり、ひどいときは外葉から枯死する。

葉柄部に発生する場合は、はじめ糸状の黒点症状が現れ、その後、墨が入ったような症状になる。病勢が進むと、墨状の部分が陥没する。この症状は、外葉のみならず結球葉でも発生がみられ、内部まで進展することもある。葉柄部に発生するべと病は、通称「茎べと」とも言われる。

晩秋や春期に、気温が比較的低温で推移し、多湿状態が続くような日が多いと多発生する。

病原菌の生態：べと病菌は、菌糸または卵胞子の形で罹病株の根部または病葉について越冬し、温度と湿度が適当な条件になると分生子を形成する。分生子は、風雨等により葉に運ばれ、発芽して細胞の境目や気孔から侵入し、感染する。発病すると葉裏に再び分生子を形成し、これらが飛散して二次感染する。べと病菌の発育最適温度は7～13℃で、最高は25℃、最低は3～4℃である。

防除のポイント：発病初期からの薬剤防除を徹底する。薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもかかるよう丁寧に行う。圃場の排水対策を実施し、通風を良好にする。

写真2：外葉の病徴

写真3：葉裏の病徴

写真4：葉柄部の病徴（通称「茎べと」）

## ・ 今月の気象予報

### 関東甲信地方 1 か月予報

( 予報期間 10月1日から10月30日 )

気象庁 ( 9月30日 発表 )

< 向こう1か月の気温，降水量，日照時間の各階級の確率 ( % ) >

[ 確率 ]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	20	30	50
降水量	関東甲信全域	20	40	40
日照時間	関東甲信全域	30	40	30

[ 概要 ]

天気は数日の周期で変わるでしょう。向こう1ヶ月の平均気温は高いでしょう。降水量は平年並か多いでしょう。日照時間は平年並でしょう。

< 1週目の予報 > 10月1日(土曜日)から10月7日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い

< 2週目の予報 > 10月8日(土曜日)から10月14日(金曜日)

気温 関東甲信地方 並か高い

< 3週目から4週目の予報 > 10月15日(土曜日)から10月28日(金曜日)

気温 関東甲信地方 並か高い

## ・ テレホンサービス

下記の情報を24時間提供しています。リアルタイムな情報を提供するために、病虫害の発生状況等によっては内容を変更することがあります。

普通作物 029 ( 226 ) 5321

10月上旬 麦類の病虫害対策について

下期 収穫後の水田管理と、大豆収穫時の注意点について

11月上旬 次年度に向けた水稻病虫害対策について

園芸作物 029 ( 226 ) 6131

10月上旬 果樹病虫害の秋季防除及び露地野菜病虫害の防除対策について

中旬 露地野菜病虫害の防除対策について

下旬 施設野菜病虫害の防除対策について

11月上旬 施設野菜病虫害の発生現況と防除対策について